

「東方の博士たち」

「博士」はギリシア語マゴス(複数形マゴイ)の訳です。そこからラテン語ではマグス(複数形マジ)となり、これは英語のマジック(「魔術」の意)の語源となりました。元来は古代ペルシアの祭司の名称で、ヘレニズム時代(紀元前4世紀以降)には、東方の魔術、夢占い、占星術、神学、哲学に通じた学者を指すようになりました。けれども、旧約聖書では占星術は忌み嫌われています(「目を天に向け、太陽や月、星などの天の万象を見て、それらに惑わされ、ひれ伏し、仕えないようにしなさい。」申命記4:19)。それゆえか、日本語訳聖書では明治時代から長らく「学者」を意味する「博士」と訳されてきました。もっともこれは漢語聖書(中国語訳聖書)の影響でもあります。

一方、新共同訳聖書で「占星術の学者」と訳されたのにも理由があります。旧約聖書の詩編や預言者には、終わりの時に異邦人が巡礼に集まってきて、主なる神にひれ伏すという待望がありました(「タルシシュと島々の王たちは……/シェバやセバの王たちが……。すべての王が彼の前にひれ伏し/すべての国が彼に仕えますように。」詩編72:10-11)。だから、マタイは忌み嫌われている星占いをあえて異邦人の代表として登場させることによって、神の救いが全ての人に及ぶことを表現しようとしているのです。

また、マゴスたちは、「東方でその方の星を見たので」(マタイによる福音書2:2)と、明らかに占星術を駆使しています。意味の正確さという点では、一般的な「博士」よりも「占星学者」の方が文脈に沿った訳だと言えます。それでも、聖書協会共同訳が「博士」としたのは、「礼拝での朗読にふさわしい格調高く美しい日本語」という翻訳方針に沿って、朗読した際の美しさを優先させた結果なのです。

このマゴスたちは5世紀にはその贈り物の数から3人とされるようになりました。さらに6世紀には「王」だと考えられるようになり、7世紀になると「カスパール」「メルキオール」「バルタザール」という名前が確定します。そして13世紀末には、カスパールはセム人(白色人種)で長白髭、ヨーロッパの老齢の王であり、黄金(王であることを象徴)を、メルキオールはヤフェト人(黄色人種)でアジアの中年の王であり、乳香(神性を象徴)を、バルタザールはハム人(黒色人種)でアフリカの青年の王であり、没薬(人間であると同時に死を象徴)を、それぞれ持参して来拝した、とされました。これは、「諸国の民は、都の光の中を歩き、地上の王たちは、自分たちの栄光を携えて都に来る。……人々は諸国の民の栄光と誉れとを携えて都に来る」(ヨハネの黙示録21:24-26)ことの実現と捉えられたからでしょう。

東方から来た博士たちが新生の幼児イエスを星に導かれて礼拝するという物語は、「異邦人の召集」という枠を超えて、全世界の代表者(世界の三大人種、三大陸、年齢の三期を代表する王)が星に導かれて一つところに集まり、新しい人として生まれた神の子、救世主の出現を礼拝する、というものになったのです。なお、女性が含まれていないのは当時の社会が父権社会だったからに過ぎません。だから、「東方の博士たち」にはこの世界に生きる全ての人が含まれていることになるのです。

博士たちは贈り物を献げながら、「王の治世に正しき人が栄え/月の失われるときまで平和が豊かにありますように」(詩編72:7)と祈ったことでしょう。そして、イエスの誕生により、「天よ、喜び歌え。地よ、喜び。/山々よ、歓声を上げよ。/主がご自分の民を慰め/その苦しむ者を憐れまれるからだ」(イザヤ書49:13)との預言が実現していきます。小さくされている者が顧みられます。争いは終わり、平和が実現します。救い主の誕生は神の愛の表れです。しかも、イスラエルを中心とした信仰では周縁部に置かれていた異邦人が、まず最初に救い主の誕生を祝っていることにも特徴があります。それはここから福音が全世界へ広がっていくことをイメージさせます。喜びは中心から外側へと広がっていくのです。

今、私たちのところにも救い主が来てくださっています。博士たちが喜び祝ったように、私たちも喜び祝いたい。博士たちが贈り物を献げたように、私たちも自分にできる精一杯を献げたい。そして、博士たちが「自分の国へ帰って行った」(マタイによる福音書2:12)ように、自分の置かれている場所でその喜びを伝える一人となっていきたいのです。

